命名からみる言語意識の地域差

阿部　雪子[1]

1．研究動機と目的

現代では、苗字や名前があるのがごく当たり前になっている。しかし、階級制度があった時代には、百姓が苗字を持つことは許されず、武士だけが名乗る権利があった。そしてその制度がなくなり、すべての人が苗字を持つことが許されたという背景がある。苗字は、その家や一族をあらわすものとして今日に至っているが、それに対して、名前はどうやって付けられるのか、と疑問を持った。

更に筆者は、自分自身の名がどうしてこの名になったか幼少の頃から疑問があった。積雪量の多い東北地方で生まれた為に「雪子」と名がつけられたのか。筆者の妹は「幸子」と書いて「ユキコ」と読む。表記は同じでも「サチコ」、「コウコ」と読ませることもできたはずである。

苗字は家柄をあらわすものであって、簡単には変更できず、選ぶこともできない。しかし名前というのは親が任意に命名する。知恵を絞って考えるものなので、親の言語意識が少なからず影響するはずであると考える。人の名前は、世代によっても流行が見られるものの、その名をつけた親や親族等の言語意識が影響することから、地域的差異が生じるのではないかと推測した。本論は、そうした命名における言語意識の地域差を探るものである。調査の対象として北海道・美唄市と沖縄県・平良市を選び、電話帳を資料として名前のデータの収集にあたった。

2．調査対象地域

2．1　北海道・美唄市

〔成立〕昭和25年4月1日　美唄町に市制施行して成立

〔面積〕277.61㎢　　〔人口〕32,072人　　〔電話帳掲載世帯数〕8952

＜立地＞

北海道中央部に位置し、札幌市の北東約60kmにあたる。美唄川などが北西の石狩川に注ぐ。西部は標高10～30mほどの低地帯をなし、菱沼・伊藤沼などの大小

---

[1] 信州大学人文学部文化コミュニケーション学科　日本言語文化専攻コース　日本語教育学分野4年生。

の沼が点在する。東部にはなだらかな丘陵が続く。市域の 36.3%が農業用地で、そのうち水田が 88%と米作農業が中心である。林野は市域の 44.6%を占める。年平均気温 7℃前後、最高気温 31～33℃、最低気温氷点下 22～23℃。年降水量は 1200～1300mm、最深積雪 120～150cm である。

当市の開拓は明治 24 年に屯田兵の部隊 100 戸の移住に始まる。大正期から炭鉱の開発が進められ、昭和 30 年代までに炭鉱の町として発展した。戦後のエネルギー革命として、昭和 38 年から市域の中小鉱山が閉山し、同 48 年にはすべての鉱山が閉山に至った。近年では工業団地が建設され、新農工都市として発展を目指している。

２．２　沖縄県・平良市[2]

〔成立〕昭和 22 年 3 月 7 日　平良町に市制施行して成立

〔面積〕64.95 ㎢　　〔人口〕34,133 人　　〔電話帳掲載世帯数〕7833

＜立地＞

市域は沖縄本島の南西、海路約 315 ㎞に位置する宮古島の北半を占め、池間島・大神島の２島を含み、東・北・西は海に面している。年平均気温は 23℃で、夏も海風の影響を受け暑熱を緩和し、各種農作物の生育に適しているが、台風による影響は甚だしい。降水量は年間 2000mm を超えるが、太平洋高気圧の優勢な夏の盛りに降雨のない日が 40～50 日間も続くという特徴がある。

明治 5 年に琉球藩、同 12 年に沖縄県の所轄となる。昭和 19 年 3 月から沖縄防衛軍参謀などの宮古島視察が始まる。8 月からは住民の疎開が始まり、主に台湾・九州に移り、推定では 1 万人にのぼる。市街地の大半が廃墟になった後、昭和 20 年に米海軍が駐留して軍政が敷かれた。それから帰島する疎開者も増えた。

戦後、市域では食糧の窮乏がその極に達した。問題解決のために市域北部に集団農場を開き、食糧の供給地としようとした。人手を増やすために移住も奨励した。

３．先行研究

３．１　人の名に使える文字

人名に使用できる文字を国の法規では以下の通りに規制している。

１．子の名には常用平易な文字を用いなければならない

２．常用平易な文字の範囲は、命令でこれを定める。

戸籍法施行規則第六十条は「常用平易な文字の範囲」を当用漢字表[3]と人名用漢字

---

[2] 沖縄県平良市は 2005 年 10 月 1 日に沖縄県宮古列島に位置する多良間村を除く全市町村、宮古郡伊良部町・上野村・城辺町・下地町と対等合併し、「宮古島市」となった

表に挙げる漢字と片仮名または平仮名、としている。

3．2　名の機能

寿岳（1973）は言語としての名の機能を三つに分類している。

指示機能…特定のもの、人を指し示す機能

表情機能…名前の雰囲気

例　亮(りょう)、翔太、聖也などはさわやかな印象

源太、重剛(じゅうご)、巌などはどっしりとした印象

見出し機能…時代、性別、地域、年齢をある程度特定できる

4．調査するにあたって

調査資料として NTT の電話帳を用いたが、掲載されているのは全世帯主とは限らない。希望によっては電話帳に掲載しないこともできる。すなわち電話帳掲載数が実際の世帯数とは異なることを留意しておく必要がある。今回の調査は名前を表記からみていく。例えば「大」と表記されていても、だい、まさる、ひろし、ゆたか、など様々な読み方をする。さらには当て字で全く異なる読み方をするかもしれない。雄基と友希はどちらも同じ「ゆうき」になるが、表記から考察するので別々の名前として扱う。

4．1　調査方法

電話帳に掲載されている名前は世帯主になるので男性名が圧倒的に多い。そのため男性名に焦点をあてて調査する。その際、以下の名前は、次のような理由から除いていく。

① 重複している名前

美唄市と平良市を対照させて両市に同じ名前があるもの。それぞれの地域の特徴的言語差をみていくため、立地や言語が大きく異なる場所において同じ名前があるということは他の地域もしくは全国的にみられる可能性がでてくる。重複しているものを除くことによって、特徴のある名前が残ると考える。

しかし同じ市内で名前が重複している場合は数量を記載して残しておく。

②女性の名、女性の可能性がある名前

末尾に美、英がついているものは男女の区別がつけにくく、どちらとも取れるのでデータには含めない。更にひらがなやカタカナを含む名前は女性と思われるものが多数であった。ひらがな、カタカナを含む名前で男性の名と断定できるものは、美唄市では 271 あるうち２例（キヨシ、サダオ）、平良市では 118 のうち３例（あきお、きよし、なる俊）だけであった。

---

[3] 当用漢字とは 1946 年に国語審議会の答申に基づいた、政府が告示した 1850 の漢字。現代国語を書き表すために、日常使用される漢字の範囲を示したもの。

③1字、3字以上の名前

2字で表記される名が大半を占めているため。

④電話帳からは苗字と名前の境目がわからないもの

電話帳には苗字と名前が3字以下の場合にはスペースが設けてあるため、苗字と名前の判断ができるが、4字以上になると判断が難しいものがあった。それらの5例については、データに含めない[4]。

5．考察

5．1　美唄市の名前

美唄市の有効な名前・・・2790

（1）上位の名前

有効な名前の中で0.1%以上のものをみていくと、「義」の付く名前が目立つ。1字目に使われているだけでなく2字目にも用いられる。「義」の付く名前は91あり、全体の3%になった。バリエーションは富んでいないが「春」も64あり2.3%だった。美唄において一番多かったのが「春雄」である。同じく季節のもので「秋」も使われているが上位に夏や冬はきていない。男性名の特長とも言える「男・夫・雄」の使用例も顕著に出ている。「作・造・蔵」があることからも、農耕が盛んで力を入れていることが窺える。「松・竹・菊」の植物も、縁起がいいとされると同時に自然の多い北海道を思わせる。名前に漢数字が用いられる事は珍しくないが、上位に「八郎」が入ってきているのは1家族における子供の数が多かった時代の背景があるのではないだろうか。

名前数	割合（%）	名前
23	0.8244	春雄
20	0.7168	幸雄
16	0.5753	春夫、利夫
14	0.5018	昭一、忠義
12	0.4301	信義
11	0.3943	勝治
10	0.3514	義治、義明、憲一
9	0.3226	義昭、義則、政勝、敏幸、
8	0.2867	英明、弘明、春男、昭二、辰雄、武司、
7	0.2509	松男、正信、末吉

[4] プライバシーに配慮し、実例を掲げることを控える。

6	0.2151	昭三、信男、政男、正志、道夫、富治
5	0.1792	一義、義人、賢二、光一、光治、孝吉、孝行、松夫、政利、清司、静雄、鉄雄、八郎、友治、利一、利明
4	0.1434	栄作、英昭、英利、岩雄、紀幸、義秋、義正、久志、憲夫、公夫、周治、勝司、昌幸、省一、慎一、真二、政信、政敏、清作、清信、善彦、竹一、忠良、定幸、哲哉、鉄男、芳治、勇次、与三、利春、力男、和憲、和行
3	0.1075	一志、一明、英俊、英勝、嘉一、貫一、岩夫、義広、義晴、義朗、菊男、久史、金作、軍治、啓二、健市、健造、源治、光春、光晴、光明、厚志、孝幸、孝弘、孝仁、幸蔵、康治、克弘、国光、時夫、次雄、周一、秋男、重蔵、重忠、俊市、潤一、昭吾、省三、伸一、伸幸、信行、政行、政志、晴雄、正秋、正敏、正昭、正範、誠一、泰三、忠利、張市、長市、哲司、哲治、道徳、徳和、博樹、保一、房雄、満雄、明彦、靖彦、靖雄、友吉、友行、由夫、裕好、与作、陽一、利秋、利和、留男、隆行

（2）孤例

① 「外」…平良市にはみられない。北海道も沖縄も、元々は日本国の領土でなかったところから日本の管轄になったという背景は似ている。しかし、沖縄は琉球国であったものが日本の所轄になったのに対し、北海道はアイヌ民族の地に入ったという違いからこの名前がみられるのかもしれない。あるいは戦時中でたくさんの病死者がでて、外と同じにならないように、外よりも勝るようにという願いが込められていると考えられる[5]。

外一、外吉、外三、外次、外勝、外雄

② 「義」…孤例からみても「義」の付く名前は平良の倍ほどある。日本の国に対しての帰属意識が平良と比べて高く、忠誠を表すこの字は好んでつけられたのであろうか。同じく「国」の付く名は美唄に見られるが、平良では１例しかなかった。「省」は逆に貧困の生活から、節約し、慎

[5] たとえば、愛知県犬山出身の学生の祖父は「外吉」という名前を持つが、兄たちが幼児のうちに死亡したため、そうしたことにならないようにと命名された名前であるという（2005年秋の談話より）。

ましい生活をという表れか。

義位、義允、義輝、義胤、義教、義憲、義宏、義幸、義晃、義行、義史、義松、義親、義政、義雪、義知、義智、義仲、義朝、義郎、国義、国儀、国吉、国松、国善、国太、国忠、国博、国繁、省基、省吉、省吾、省司、省治、省六

③ 「鉱」…現在はすべてが閉山しているが、以前に炭鉱が盛んだった事を物語っているのだろうか。ただし、1例しかない。

鉱治

④ 「繁」…「茂」も同様。市や町、その家が繁盛するのはもちろん、みどりが生い茂っていることを象徴している。自然が豊かな立地・風土の美唄ならではのものとして「森、杉、滝、川、雪、牧」を用いている名前がみられた。

繁広、繁弘、繁行、繁作、繁司、繁視、繁治、繁樹、繁勝、繁政、繁則、繁之、繁敏、繁弥、茂栄、茂三、茂秋、茂晴、茂生、茂之、茂敏、茂良、茂和、茂昴、森一、杉晴、杉男、滝夫、滝雄、滝男、川永、雪男、雪夫、雪雄、牧伯、牧夫

⑤ 「美」…通常「美」は女性によく用いられる。末尾にくると男性名のものもあるが、1字目にきているのはそう多くない。男性でも美意識が高い、というよりはこの地名である「美唄」に由来しているのではないだろうか。

美検、美男、美徳、美夫、美明

（3）結果

美唄市の特徴的名前を以下のように考察した。

A：戦争が背景にみられる名

日中戦争が始まってから日本の国民の多くは「国を挙げての全面戦争」と我がこととして捉えた。それ以前にも中国本土での軍事衝突はあったものの、日本人にとって遠い異国での小競り合いでありすぐわが身に降りかかることとは感じていなかった。これは太平洋戦争で無意識の中に重く不安がのしかかってきた現象であるといえる。

A′ ：義、軍、征、勝、将、勝、国、邦、治、省

B：自然・草木・植物の名

優良田園住宅地になるほど森林や田園に囲まれた街で、環境への負担軽減や自然資源の有効活用、住宅地内でのリサイクルを行っている。身近にこれらを感じていることから命名にも影響がある。「松・竹・梅」は寒さに耐えるめでたいものの象徴で等級を表すときにも使われるが、気温が零下を下回り、自然が豊な美唄

にはぴったりの名である。従来、「花は散ってしまう」、「植物は枯れてしまう」という理由から敬遠されてきたが、ここに挙がってきている名は、葉や花は寒い冬には落ちてしまっても木そのものはじっと立ち続けているものばかりだ。同時に北海道は広大な地で、農場・牧場もあちこちあることから「牧」がみられる。

B′ ：樹、松、幹、菊、森、杉、川、滝、竹、梅、水、牧、岩、石、藤

C：動物の名

一般的に動物の名は縁起がよいとされる。丈夫で強そうな「トラ」、戦死者が多く長生きすることを願った「ツルは千年、カメは万年」、想像上の動物であるが動物の中でも特別に優れ、自由に飛行して雲を起こして雨を降らす「リュウ」。他には十二支（干支）の動物名になっているものもある。

C′ ：熊、卯、亀、虎、鷹、寅、酉、象、竜、龍、辰、鶴

D：季節に関する名

「移り変わる」という理由から季節の名は好んでつけられなかったがいくつかみられた。興味深いのは「春と秋」は頻繁に使用されているが、「夏」の名は「夏弘」一つ、冬は例がなかったことである。北海道での夏は短く、瞬く間に過ぎ去ってしまうからか、冬は「雪」で代用しているようでもある。寒い冬に雪の降らない地域ではみられない名である。

D′ ：春、夏、秋、雪、寒

E：男性を象徴している名

現代においては名づけで男性名を女性に、女性名を男性につけたり、どちらともとれる中性的な名前もでてきたのは女性の社会進出で男女平等が叫ばれている背景がある。以前は男女の差があったことを物語るように男性らしい名があった。平良と比較してみると特に「郎」は使用されていないことから美唄の特徴としてもいいかもしれない。更に「郎」は名前の末尾にしか使用されていなかった。女性には「子、美」などのほかにひらがな、カタカナを使う傾向がある。

E′ ：男、夫、雄、郎

F：漢数字の入っている名

一から百、千といった漢数字が用いられる。ベビーブームで一家にたくさん子供が産まれたり、長男・次男で跡継ぎを明確にするために使用された。現代では少子化が進み、4人兄弟姉妹であれば多いとされるが、8人兄弟の末っ子で「八」が使われたりもした。漢数字ではないが、初、留、末、次も同じ分類に入ると考えられる。

G：経済が背景にうかがえる名

昔は日本を出国したといっても、移民として重労働を続けたり、戦争でつらい目に合った人が多く、個人が自由に外国を歩く事は夢物語であった。「外国に追いつきたい」という思いがあり「広い世界にでたい」「広い知識を得たい」願いから

用いられたのではないか。
G′　：広、弘、宏、浩、博

5．2　平良市の名前

平良市の有効な名前…3021

（1）上位の名前

平良市も美唄市同様 0.1%以上の名前をみていくと「恵」のつく名前が占めている。トップ1，2とも含まれている。その数 237 例にものぼり、全体の 7.8%にもなる。次いで「玄・栄・徳」が目立つ。更に、いわゆる日本的な名前ではないものが大半であることがわかった。表記から音を推測して考えてみても、「音読み＋音読み」での組み合わせが多い。この組み合わせだと響きに違和感を覚えるのは、日本の一般的名前には訓読みが含まれるからということがわかった。1 字名で音読みのみの名はあるが 2 字以上になった場合、必ず訓読みが含まれてくる。

名前数	割合（%）	名前
26	0.8606	恵徳
19	0.6289	恵勇
16	0.5296	玄徳
15	0.4965	恵俊、恵良
13	0.4303	金吉、恵栄
12	0.3927	盛一
11	0.3641	金一、金三、博一、博和、
10	0.331	恵信、恵清、恵長、勇栄
9	0.2976	剛士、清栄、盛吉、武一、
8	0.2648	啓三、恵光、恵勝、源徳、玄祥、広一、勝栄、昌彦、豊吉
7	0.2317	寛栄、寛信、恵吉、玄光、弘昭、春栄、勝一、勇勝
6	0.1986	栄清、栄徳、寛勇、恵祥、恵和、玄勝、玄信、玄忠、秀一、正信、清光、盛光
5	0.1655	安男、寛雄、恵次、恵盛、恵典、恵福、恵茂、恵雄、源一、玄吉、玄幸、玄昭、玄福、玄勇、玄雄、玄良、光正、宏幸、幸徳、秀吉、昌行、澄夫、政吉、清正、清徳、盛勇、忠彦、朝栄、平勇、芳一、隆弘
4	0.1324	栄光、栄助、寛忠、寛徳、寛裕、吉光、吉孝、恵喜、恵三、恵修、恵昌、恵仁、恵正、恵知、健勇、玄栄、玄喜、

		玄次、玄俊、玄春、玄仁、幸栄、幸喜、浩吉、宗和、秀勝、秀信、勝盛、勝徳、昌栄、昌栄、昌三、伸男、清重、清勇、盛長、盛良、善弘、朝光、朝仁、朝二、貞吉、哲三、武徳、福吉、芳弘、民夫、明三、明春、明良、雄三、洋三、利夫、龍雄、和広

（2）孤例

①「恵」…孤例からみても「恵」のつく名前のバリエーションは豊富である。美唄では１例しかなかったものの、平良においては４４例とその差は明らかだ。

恵永、恵規、恵教、恵金、恵勲、恵建、恵憲、恵弘、恵校、恵行、恵作、恵史、恵市、恵寿、恵秀、恵昇、恵照、恵上、恵進、恵人、恵政、恵生、恵詮、恵善、恵全、恵蔵、恵太、恵辰、恵智、恵致、恵貞、恵哲、恵展、恵道、恵任、恵伴、恵富、恵武、恵保、恵裕、恵亮、恵令、恵六

②「玄」…「恵」同様、孤例になっても多く使われている。かつて沖縄は琉球国として中国の影響下にあったことから、三国志の漢蜀の武将・劉備の字の影響があるのかもしれない。

玄伊、玄瑛、玄凱、玄業、玄熊、玄啓、玄五、玄広、玄康、玄弘、玄恒、玄行、玄作、玄順、玄助、玄伸、玄真、玄臣、玄親、玄蔵、玄達、玄知、玄範、玄文、玄方、玄隆、玄价、

（3）結果

平良市の特徴的名前を以下のように考察した。

A：動物の名

美唄市との差はあまりみられなかったが、平良市においても同じように動物の名前が好まれて使用されているのはやはり縁起がいいからだと考えられる。

A′　：亀、熊、虎、辰、竜、龍

B：自然・草木・植物に関する名

こちらは梅ではなく「桃」がでてきている事に注目した。弥生時代に中国から輸入したもので、果実は水菓子として好まれた。中国においては仙木・仙果と呼ばれ、邪気を祓い不老長寿を与える植物として親しまれている。更に桃で作られた弓矢は悪鬼除けになり畑にさすと虫除けのまじないとなる。桃のみは吉祥図案であり、祝い事の際には形を似せた饅頭菓子がでるほどだ。

美唄と違って南以外を海で囲まれた環境にあるため、「洋」が使われている名も多い。更に台風の影響があったり雷雨にもあう場所ということもあり「雷」が付

く名前もある。
B′ ：岩、菊、松、森、竹、桃、藤、樹、林、洋、雷
C：中国の名が背景にある名
美唄と比較して圧倒的に使用頻度が多いもの、「音読み＋音読み」の組み合わせで使用されるケースが多いもの。「勇」は美唄でも使用されているが、名前の末尾に使われているケースは平良の特徴といえる。
C′ ：名前の前後共に使用される…栄、恵、景、源、玄、昌、朝、方
主に名前の末尾に使用される…勇、徳、福、寛

6．今後に向けて

6．1　問題点

現在では交通機関も発達し、転勤や引越しなどで住みたいところに住むことができるようになっているために、電話帳に名前が載っていたとしても名づけ親がその地域の言語を話しているとは限らない。さらにテレビ、インターネットなどメディアの普及から莫大な量の情報の入手と共通語化が起こっていたり、広い範囲での交流も増えているので、命名においての地域差がそれほど顕著に表れなくなるのではないか。

6．2　反省

今回は表記が2字の男性名にのみ焦点をあてたが、データをもっと細かにみていく必要があったと思う。大まかにデータを出して顕著に結果がでているもののみをあたったので、ひとつひとつの名の背景まで掘り下げていくことができなかった。

資料には載せていないがカタカナ、ひらがなの名はほぼ女性名で漢字表記のものもあった。まだ男性を一家の大黒柱としている傾向があることから電話帳に載せる名は男性名が圧倒的に多いが、女性名も少なくなく記載されているのは、女性が世帯主になっている、つまり女性が長生きしてその家に留まっていることを表していると考える。このような名前も疎かにせずに研究する必要があったと反省している。

こちらもデータには載せていないがすべての名からの統計をみてみると、トップ20のうち美唄では実に16、平良では10が、1字の名だった。1字の名は昭和8年から35年の間に流行したものである。「実・稔・茂・豊」という名が多く広く使われているという事は、多くの人が農業に携わっていたからだと考えられる。特に昭和初期の不況と飢饉では多くの農村で餓死寸前のところまで追い込まれた。収穫に関しては差し迫った感覚があったと思われる。災害、冷害、凶作におびえ、収穫の量はときに命に関わる重大事であった。そのことは、こうした名からも考察ができるのではないだろうか。

６．３　これからの研究

平良市の名で関心をひくものがあった。「メガ」という名である。「メガ」だけのものもあったり「カニメガ・マツメガ」のように用いられてもいた。ほかに「かまど」の名もいくつかみられ、女性が台所にたつことから付けられた名だという。夢を食べるといわれる動物「ばく」も目に留まった。平良市の名前は中国の影響を受けていると思われる名が多かったので、中国からの留学生に聞いてみたりして実際に中国にある名前なのかどうか考えていくと更に分析できるはずである。今回取り扱わなかった名からもその地域の文化・方言がみられると思うので、広く扱うことが必要であろう。

今回は立地条件の異なる北海道と沖縄から人口が同程度の市を選んだが、ほかに同じ県内でも中心部と郡部を選んだり、あるいは、東西を比較するために東京と京都からサンプルをとってみても更なる発展になるかと思う。

【参考文献】
大橋信夫（1994）『名前の読み方辞典』東京堂出版
奥富敬之（1999）『日本人の名前の歴史』新人物往来社
紀田順一郎（2002）『名前の日本史』文藝春秋
小林隆・篠崎晃一編（2005）『ガイドブック方言研究』ひつじ書房
寿岳章子（1979）『日本人の名前』大修館書店
第一生命広報部（1987）『苗字と名前』恒友出版
田中克彦（1996）『名前と人間』岩波新書
東京堂出版編集部（1995）『名前の読み方辞典』東京堂出版
西沢教夫・牧野恭仁雄（2001）『日本の「なまえ」ベストランキング』新人物往来社
渡辺三男（1980）『日本人の姓名』ぎょうせい
渡辺三男（1967）『日本人の名まえ』毎日新聞社
【調査資料】
NTT 東日本　ハローページ　岩見沢地方版　掲載情報 2003. 10. 30
NTT 西日本　ハローページ　沖縄県宮古版　掲載情報 2005. 3. 22
【参考 WEB】
総務省統計局ホームページ　http://www.stat.go.jp/

〔付記〕本稿は、平成 17 年度に信州大学人文学部に提出した筆者の卒業論文「命名における言語意識の地域差」の一部をとりあげ、まとめたものである。